

深イ～話！

No.109

——「あんたのようになりたい」鈴木百合子(パンプキンエッセー大賞)——

小学生だった頃、学校から帰ると家には誰もいなかった。歩いて7, 8分の所に畑があり、大抵母はそこにいた。母を呼ぶと、腰を伸ばしてこちらを見て笑った。

母は、いつも田畑仕事を黙々とこなしていた。そこに、父の姿はない。それは、ごく当たり前の光景だった。父は、酒好きの遊び人だった。定収入のない貧しい生活に、追いつけをかけるように居酒屋が取り立てに押しかけた。家に帰りづらくなった父は、町の旅館に泊まり込み、しばらく帰ってこない。

母は、^{しゅうとめ}姑にお金を借り、中学生のすぐ上の姉は、父の説得と宿代の支払いに走った。

ある時、父は、丹精込めて育てた野菜を農協へ出荷に行った帰り、知人たちに酒を振る舞い、お金を使い果たしてしまった。いつまでも戻らない父を捜しに出かけた母は、泥酔した父をリヤカーに乗せ、五キロの夜道を帰ってきた。

母は大病も患った。腸にがんが見つかり、三度目の手術の時は、死の淵をさまよった。それでも父の遊び癖は、改まらなかった。

母は、何度も離婚を考え、ついに決心して実家に帰った時、厳格な父親に追い返されてしまったという。

そんな父にも五十歳の時、転機が訪れた。近所に製薬工場が建ち、そこで雇ってもらえることになったのだ。父は、曲がりなりにも十数年働き続けたが、最後は仕事中に飲酒して、クビになった。

家族に、苦労の種を蒔き散らした父は、その後がんに倒れ、十七年前に逝った。

法事のたびに、私たち姉妹が集まると、不甲斐ない父の悪口に終始するのは言うまでもない。それを、母は何も言わず、笑いながら聞いている。

母にとって、父との生活は、幸せとはほど遠いものだったが、必死に耐えながらも精一杯生きた時間だったのかもしれない。それが、振り返ってみると、闇の中の星のようにキラリと光を放って、懐かしさとなって母の心を包み込むのだろう。きっと——。



母を困らせたのは、父だけではなかった。

この私である。中学から高校まで、私の反抗期は長く続いた。四人姉妹の三番目という私は、引っ込み思案で気難しい子どもだった。両親は、頭が良く活発な姉二人と私を、よく比較した。

私は、特に母に対して罵声を浴びせ、悪態をついた。高校の三年間は、口をきくことさえなかった。

早く卒業して、家を出たかった。母は動じることなく常に毅然としていた。

就職が決まって上京する日、意外にも母は駅まで見送りに来た。私は、その母にむかって一言「あんたのようには、ならないから」と言い捨てた。その言葉は母の胸にグサリと刺さり、辛かったと後になって聞いた。

あれから、四十年余りの歳月が流れ、今、私には、家庭を持つ娘と息子、そして五人の孫がいる。父とよく似た酒好きな人と結婚、そして離婚。今は、母と同じ一人暮らしである。

母は、今年卒寿を迎え、大好きな書道に勤しみ、カラオケ教室に通い、自力で前向きに生きている。

母はよく言う。「負けないで、頑張っていることが楽しい」と。波乱万丈の人生が、母を強くし、何があっても朗らかに生きる力を与えたのだろう。苦労の種は、今、花となり、凜として咲き誇っている。

そんな母へ、心を込めて伝えたい言葉がある。それは、「あんたのようになりたい」という一言である。